

気積の存在と場の共存

COEXISTENCE OF EXISTENCE OF VOLUME AND FIELD

12223003

榎本 直子

主査 宮 晶子

教授

副査 篠原 聡子

教授

江尻 憲泰 教授

近年、空間から場・物へと建築における主軸が変わってきたといわれるように、空間と場には、空間が強くなると場が弱くなり場が強くなると空間が弱くなるという関係性があると考えられる。空間と場のどちらかではなく、どちらも存在することで豊かな建築になるのではないだろうか。本研究における空間とは、気積の存在のことを指し、気積の存在を認識することとは気積にエッジがあるかのように感じる状態のことを指す。この気積の存在を認識することによって、多様なシーンの移り変わりを得られると考える。気積の存在を認識するための要素として、建築事例をもとに4つの要素を挙げ、その見え方について仰角を用いて分析した。また、建築によって生まれる場においても、建築事例をもとにどのような行為を引き起こすかについて分析した。本研究をふまえて修士制作では、気積の存在を認識するための要素と、場が生まれるための要素との組み合わせ方によってできる建築を考える。気積の存在を認識することで、まず大きな塊としての居場所を見つけ、次にそれぞれの場によって留まる居場所を見つけられるような図書館を提案する。

Keywords: *existence of air, place, atrium, floor slab thickness, vision, sit*

気積の存在, 場, 吹き抜け, 床スラブの厚さ, 視覚, 座る

1. はじめに

1-1. 研究背景と目的

建築の歴史の移り変わりとして、坂本卓氏¹⁾は、モダニズムにおける建築は、空間性を主軸にすえたが、60年代後半においてその原理崩壊に直面し、建築は場・物などを含み多元的な、複数の原理に基づいた時代に入っていったと述べる。

建築自体によって場をつくる建築は、空間がぼんやりとする一方で、空間を強く感じる建築において、場をつくるものは建築ではなく家具によることが多いように、空間が強くなると場が弱くなり、場が強くなると空間が弱くなると考える。

そこで本研究では、空間と場が同時に存在する“気積の存在を認識できる建築”と、“建築によって生まれる場”の共存について、知覚から考えていく。

1-2. 気積の存在

本研究における空間を強く感じる建築とは、気積の存在を認識できる建築のことを指す。気積の存在を認識することによって、空間同士は繋がっていても、自身のいる気積とは異なる気積であると認識し、多様なシーンの移り変わりを得られると考える。

1-3. 研究構成

1章では、研究背景と目的として、空間と場との関係性について述べる。2章では、空間について考えるうえの気積の存在の定義と、空間把握のための2つの知覚能力について述べ、3章では、気積の存在の事例比較研究として気積の存在を認識するための要素を分析する。そして4章では場の事例比較研究として場をつくるために必要な要素を分析し、5章でそれまでの分析を用いて設計を行う(図1)。

1章 研究背景・目的	・空間と場との関係性について
2章 気積の存在とは	・気積の存在の定義 ・空間把握のための2つの知覚能力
3章 気積の存在の事例比較研究	・気積の存在を認識するための要素の分析 — 床スラブ部分の厚さに対する天井の高さの比率 — 直線と曲線により相互貫入の違い — 仰角による見える範囲と気積の存在の関係性
4章 場の事例比較研究	・場をつくるための要素の分析
5章 設計	・そこまでの分析を用いて設計を行う

図1 研究構成

2. 空間

2-1. 気積の存在をヴォリュームの存在として認識する

“気積の存在を認識できる”とは、建築によって、気積にエッジがあるかのように感じ、気積をヴォリュームのように認識できる状態のことである(図2-a)。それに対して、気積の存在を認識できない場合は、気積よりも建築にサーフェイスを強く感じる状態である(図2-b)。

そこで、気積の存在を認識するために、2つの視覚を挙げる。

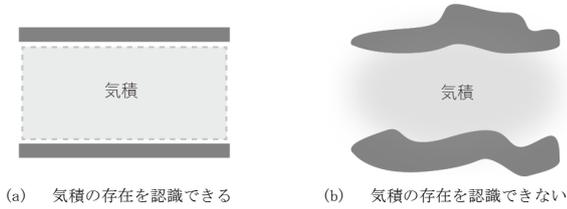


図2 空間における気積の存在

2-2. 「視覚的な視覚」と「触覚的な視覚」

芸術学の知覚概念として、リーグル²⁾が述べる「視覚的/触覚的」、ヒルデブランド³⁾が述べる「遠隔像/近接像」という対概念がある。そして前川修氏⁴⁾は、人間の空間把握の2つの知覚能力である視覚と触覚について、どちらも視覚的特性に属し、「視覚的な視覚」、「触覚的な視覚」と区別されると述べる。

「視覚的な視覚」とは、見る人の位置が対象から遠く、両目では角度をなさず、平行にものを見て目で全体像を捉えられる場合のことである(図3-a)。もう一方の「触覚的な視覚」とは、全体像を一目では捉えきれないほど近付いた場合、断続的に複数の像が視力調整する目によって合成される場合のことである(図3-b)。

建築における「視覚的な視覚」は、建物を外から見た場合に、また「触覚的な視覚」とは建物の内部に入った場合に働くと考えられる。

それに加えて、気積という観点においては、建物内部でも「視覚的な視覚」と「触覚的な視覚」の両方が働いていると考えられる。気積の存在を客観的に対象として捉えられる場合、「視覚的な視覚」によって気積を見ており、自身がいる側の気積には「触覚的な視覚」が働き、それぞれの気積に対する体験の差が得られると考える。これらを合わせて気積の存在を認識しているのではないだろうか(図3-c)。

また、柱などのエレメントに対しても「視覚的な視覚」と「触覚的な視覚」の両方が働いており、この2つの知覚能力がエレメントに対して働くことで、場をつくることに繋がると考える(図3-d)。

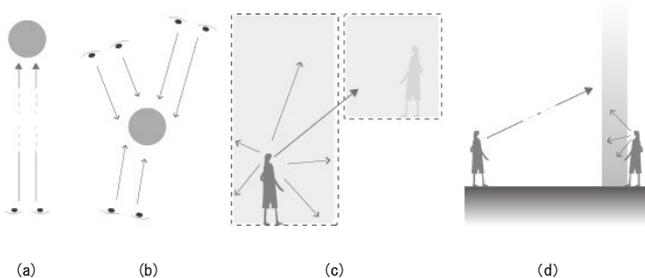


図3 「視覚的な視覚」(a)と「触覚的な視覚」(b)と、気積(c)とエレメント(d)における「視覚的な視覚」と「触覚的な視覚」

3. 気積の存在の事例比較

3-1. 気積の存在を認識できる建築

筆者が体験した建築の中から、気積の存在を認識できると感じた建築(表1)を、気積の存在を認識できた要素について分析し、4つの要素を挙げた。

(a) 床スラブ部分の厚さが見える

〈サンパウロ大学建築都市学部棟〉にあるような吹き抜けは、下の階から上を見上げると床スラブ部分の厚さと上の階の様子がわかる階高である。床スラブ部分の厚さが異なる空間から客観的に見えることで、床スラブ部分の上下に気積の存在を認識する(図4-a)。

(b) 天井まで達しない壁

銭湯の女湯と男湯は、視線を遮るけれど天井までは達していない壁によって隔てられている。壁の上に連続する天井が見えることで、天井との間に気積の存在を認識する(図4-b)。

(c) 同じ天井を共有し、床レベルが異なる

〈埼玉県立博物館〉において、天井はひとつつながりでありながら床レベルが異なる空間が隣り合う。一方からもう一方の空間が客観的に見えることで、気積の存在を認識する(図4-c)。

(d) 同じ床を共有し、天井の高さが異なる

〈日野市立中央図書館〉では、同じ床を共有しながら、異なる天井の高さの空間が隣り合い、客観的に見えることで気積の存在を認識できる(図4-d)。

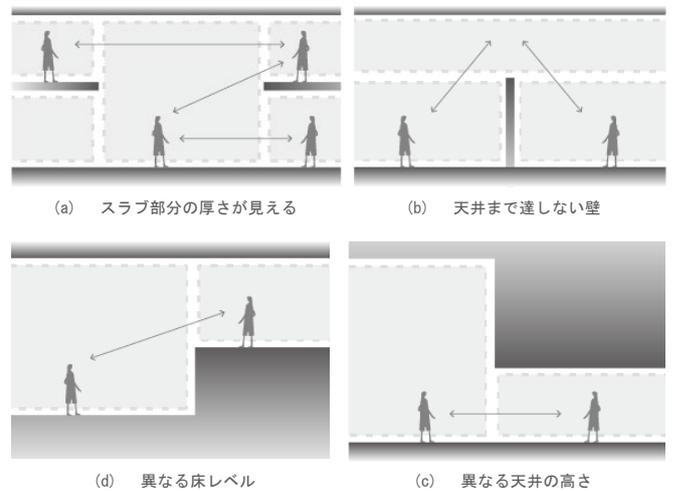


図4 気積の存在を認識するための要素

3-2. 床スラブ部分の厚さと天井の高さの分析

3-1の(a)より、空間の気積を認識するための要素のひとつは、床スラブ部分の厚さが見えることだと考える。このとき、床スラブ部分の厚さと天井の高さとの関係によって、気積の存在における認識のしやすさが変わると考えた。

そこで、筆者が体験したことのある建築の中から、床スラブ部分の厚さが見える建築を14挙げ(表1)、床スラブ部分の厚さに対する天井の高さの比率を分析した。

3-3. 気積の存在を認識できる比率の考察

床スラブ部分の厚さに対して、上側の空間における天井の高さとの比率（図5）を見ると、気積の存在を認識できる建築における、天井の高さ（上）：床スラブ部分の厚さはおよそ3：1超7：1未満であると考えられる（表1）。

天井の高さ（上）：床スラブ部分の厚さが3：1超7：1未満の建築は、床スラブ部分が上下の空間の間に余白を設けるように働くことで、上下にそれぞれ気積の存在を認識できると考える（図6-a）。一方、天井の高さ（上）：床スラブ部分の厚さが3：1以下の建築は、床スラブ部分が厚すぎることから、床スラブ部分が壁のようになって上下の空間を認識できないため、気積の存在を認識できないと考

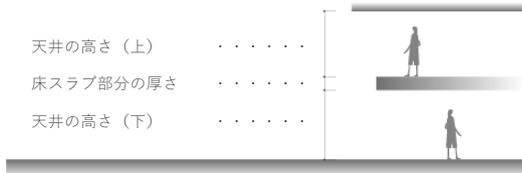


図5 床スラブ部分の厚さに対して比率を求める部分

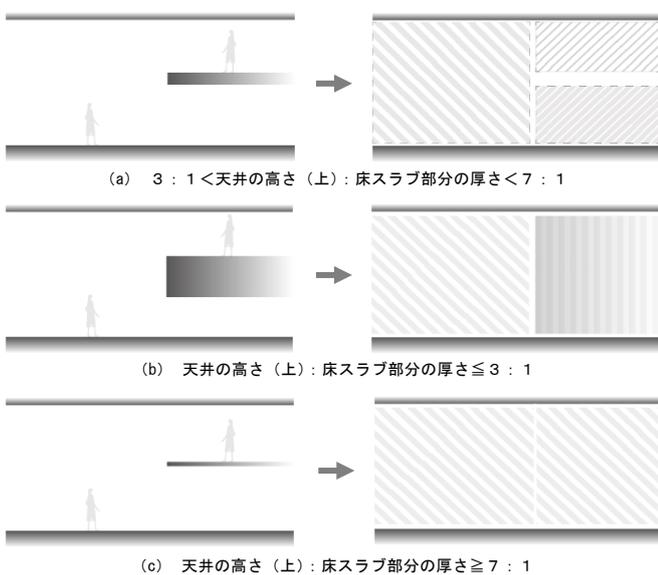


図6 スラブ部分の厚さに対する天井の高さの比率による気積の存在

える（図6-b）。また、天井の高さ（上）：床スラブ部分の厚さが7：1以上の建築は、床スラブ部分が薄すぎることから、上下の気積の存在が一体化するため、気積の存在を認識できないと考える（図6-c）。

床スラブ部分の厚さに対する天井の高さ（上）が3：1超7：1未満に含まれているが、〈太田市美術館・図書館〉は気積の存在を認識できなかったことから、床スラブ部分の厚さが見えること以外にも必要な要素があると考えられる。そこで、気積の存在を認識できる建築と、〈太田市美術館・図書館〉の違いとして、〈太田市美術館・図書館〉には平面構成に曲線が用いられていることから、直線と曲線による気積の存在の違いについて分析した。

3-4. 直線と曲線による気積の相互貫入の違い

直線で平面を構成された建築は、気積に方向性が生まれると考える（図7-a）。一方で、曲線で平面を構成された建築の気積は、方向性は生まれずにグラデーション状に広がると考える（図7-b）。

直線によって方向性の生まれた気積は、吹き抜け等の、空間が隣り合う場所において気積同士が相互貫入しているように認識できる。この相互貫入によって、客観的に見ている気積の存在だけでなく、気積が重なるもう一方の空間における気積の存在も認識しやすくなるため、直線で構成された建築は気積の存在を認識できると考える。

それに対して、空間がグラデーション状に広がる、曲線で平面を構成された建築では、気積の重なりである相互貫入ではなく、気積の混ざり合った濃淡が生まれる。それによって、気積の存在を客観的に見ることができず、相互貫入が起きないため、気積の存在を認識できないと考える。

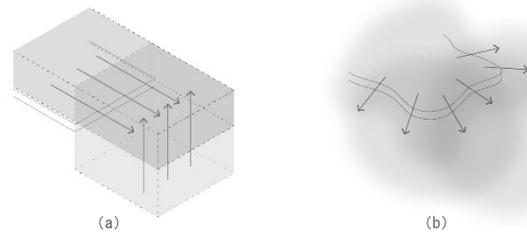


図7 直線 (a) と曲線 (b) における気積の相互貫入の違い

表1 研究対象

作品名	設計者・設計事務所	用途	延床面積 [㎡]	天井の高さ [mm] (下)	床スラブ部分の厚さ [mm]	天井の高さ (上) [mm]
須賀川市民交流センター tette	石本建築事務所 + 畠森泰行	図書館・生涯学習支援	13698.58	2310 (1.54)	1500 (1)	2800 (1.86)
ポーラ美術館	日建設計	美術館	8322.67	4140 (3.27)	1264 (1)	3600 (2.84)
えんぱーく 塩尻市市民交流センター	柳沢潤	図書館・市民交流センター	11901.64	2600 (2.52)	1030 (1)	3200 (3.11)
国立国会図書館東京本館	前川國男	図書館	74900.00	2700 (3.97)	680 (1)	2620 (3.85)
香川県庁舎	丹下健三	県庁舎	11871.99	2400 (4.00)	600 (1)	2400 (4.00)
埼玉県立博物館	前川國男	博物館	11363.00	3500 (3.18)	1100 (1)	4600 (4.18)
サンパロ大学 建築都市学部棟	Vilanova Artigas	大学	19777.12	3200 (4.57)	700 (1)	3200 (4.57)
兵庫県立美術館	安藤忠雄	美術館	27461.41	4050 (6.23)	650 (1)	3000 (4.61)
丸亀市猪熊彦一郎現代美術館・丸亀市立図書館	谷口吉生	美術館・図書館	11413.95	2880 (1.28)	2080 (1)	10570 (4.69)
太田市美術館・図書館	平田晃久	美術館・図書館	3152.85	2360 (3.47)	680 (1)	3590 (5.28)
日本女子大学 百二十年館	妹島和世	大学	5799.39	3700 (6.23)	540 (1)	3000 (5.55)
日本女子大学 図書館	妹島和世	図書館	3768.72	3400 (5.66)	600 (1)	4100 (6.83)
京都府立陶板名画の庭	安藤忠雄	美術館	212.20	4340 (10.28)	420 (1)	3000 (7.14)
こども本の森 中之島	安藤忠雄	図書館	815.10	3035 (13.48)	225 (1)	2530 (11.24)
日野市立中央図書館 ※	鬼頭梓	図書館	2220.00			
粟津邸 ※	原広司	住宅	256.00			
黄金湯 ※	長坂常 + 高橋理子	公衆浴場	1113.34			

：気積の存在を認識できる建築

※ 床スラブ部分の厚さが見えない建築

ここまで分析を行ってきたように、床スラブ部分と上下の空間等の関係性によって気積の存在を認識するためには、見えている範囲を考慮する必要があると考える。そこで、3-1 で分析した気積の存在を認識できる建築を、仰角を用いて分析する。

3-5. 全体を見ることができる仰角と気積

H. メルテンスの見解を踏まえて、H. ブルーメンフェルトは、人間が前方を2：1の割合で上部を見るとすると、建築と視点との距離(D)と、建築の高さ(H)は、 $D/H=2$ 、つまり仰角 27° のときに建築を全体として見ることができる⁵⁾と述べる(図8)。

また、社団法人 人間生活工学研究センター⁶⁾は、真っ直ぐ正面を見るときを基準として、案に上を見られる見上げ角度は 20° であると述べる(図9)。

以上の仰角 27° と、対象の全体を見ることができる仰角 27° を案に上を見られる見上げ角度 20° に足した角度である仰角 47° を使って、床スラブ部分が見える場合と天井まで達しない壁がある場合、異なる天井の高さの場合、異なる床レベルの場合を分析する。

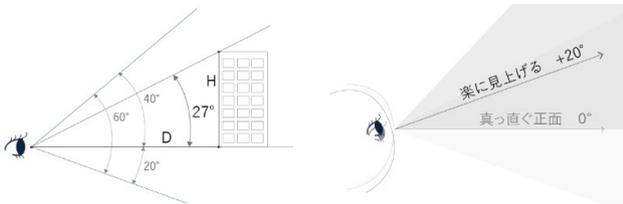


図8 全体を見ることができる仰角 図9 案に上を見られる見上げ角度

3-6. 全体を見ることができる仰角と気積

仰角 27° に対象が収まるためには、高さに対して距離が2倍必要であることから、平面的な距離が必要である。仰角に収まる対象を、床スラブ部分が見える場合を例とすると、対象を床スラブ部分の上辺としたとき、高さに対する距離が足りないと、対象を見ることができない(図10-a)。そこで、床スラブ部分の上辺の高さから視線の高さを引いたものをH、床スラブ部分の先端から観測者までの距離をDとし、 $D/H \geq 2$ になる場合を分析する(図10-b)。また仰角 47° のときに、床スラブ部分先端から真上に伸ばした延長線と天井との交点が収まる場合を分析する(図10-b)。

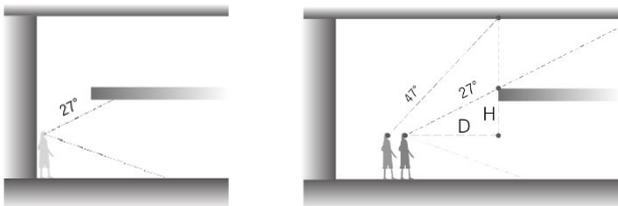


図10 スラブ部分が見えない場合(a)と見える場合(b)

3-7. 気積の存在を認識できる4要素ごとの仰角の事例比較

床スラブ部分が見える建築は、床スラブ部分の上辺が仰角 27° に収まる平面範囲を灰色で示し、床スラブ部分先端から真上に伸ばした延長線と天井との交点が仰角 47° に収まる平面範囲を斜線で示す(図11)。

天井まで達しない壁のある場合は、仰角 27° に壁の先端が収ま

る場合を灰色で示し、その壁の先端から真上に伸ばした延長線と天井との交点が 47° に収まる場合を斜線で示す(図12)。

異なる天井の高さの空間が隣り合う場合は、天井の高さが変わる先端が仰角 27° に収まる平面範囲を灰色で示す(図13)。また、異なる天井の高さの空間が隣り合う場合に気積の存在を認識するためには、天井の高さに差を感じる必要があると考え、仰角 27° の範囲に天井が触れる場合と、そうでない場合を調べる。そこで、自身がいる空間からもう一方の空間をみたときに、自身がいる方の天井に仰角 27° が触れる範囲を横縞模様で示す(図13)。

異なる床レベルの空間が隣り合う場合では、床レベルが変わる先端が仰角 27° に収まる平面範囲を灰色で示す(図14)。また、高い側の床の先端から真上に伸ばした延長線と天井との交点が仰角 47° に収まる場合を調べ、斜線で示す(図14)。

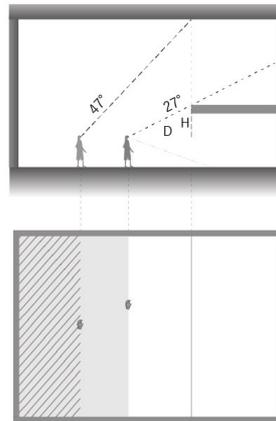


図11 床スラブ部分が見える

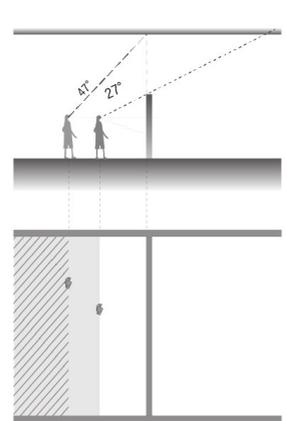


図12 天井まで達しない壁

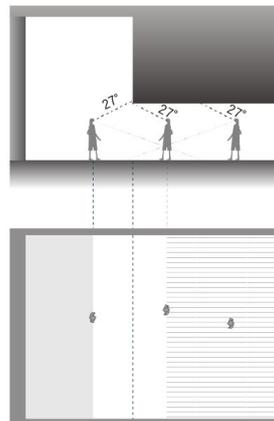


図13 異なる天井の高さ

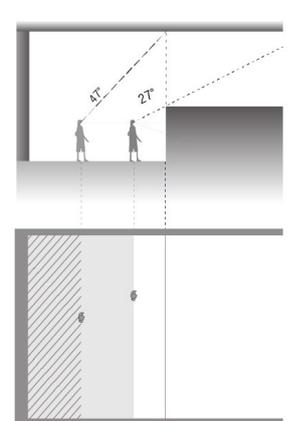


図14 異なる床レベル

床スラブ部分が見える場合

(日本女子大学図書館)

- ・ $3:1 <$ 天井の高さ(上):床スラブ部分の厚さ $< 7:1$
- ・気積の存在を認識できる

外周部分にスロープがあることで、スロープ側から中央部分の開架書架・閲覧席の床スラブ部分の厚さが見えたり、反対に開架書架・閲覧席側からスロープの床スラブ部分の厚さが見えたりする。また、外周に床スラブ部分の厚さが見えることから、仰角 27° と 47° に収まる範囲の大部分が重なっていると考える(図15)。



図 15 日本女子大学図書館

〈丸亀市猪熊玄一郎現代美術館〉

- ・ $3 : 1 < \text{天井の高さ(上)} : \text{床スラブ部分の厚さ} < 7 : 1$
- ・ 気積の存在を認識できない

仰角 27° に対象が収まる平面範囲も狭いうえに、仰角 47° に対象が収まる平面範囲がないことから、気積が客観的に見える位置がないことがわかる(図 16) 床スラブ部分の厚さに対する天井の高さの比率は、気積の存在を認識できる比率に収まっているが、気積の存在を認識できないのは、床スラブ部分とそれによって分けられた気積が見えないことが関係していると考えられる。

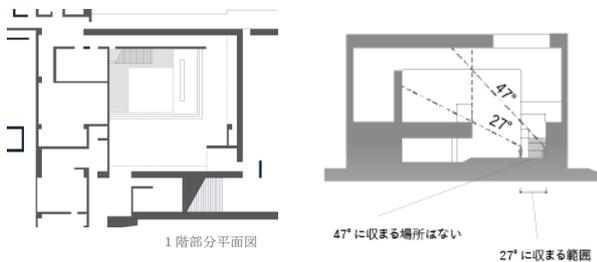


図 16 丸亀市猪熊玄一郎現代美術館・丸亀市立図書館

〈兵庫県立美術館〉

- ・ $3 : 1 < \text{天井の高さ(上)} : \text{床スラブ部分の厚さ} < 7 : 1$
- ・ 気積の存在を認識できる

同じ断面上に吹き抜けがあるため、仰角 47° に対象が収まる範囲は小さいが、平面的に対象から距離を取ることができるため、仰角 47° に収まる範囲もある(図 17)。



図 17 兵庫県立美術館

天井まで達しない壁の場合

〈黄金湯〉

- ・ 気積の存在を認識できる

女湯と男湯を分ける壁の先端の高さと、天井の高さとの差が少ないため、仰角 27° に壁の先端が収まる範囲と、その壁の先端から

真上に伸ばした延長線と天井との交点が仰角 47° に収まる範囲に大きな差はないことで、天井との間が客観的に見える(図 18)。



図 18 黄金湯

異なる天井の高さの場合

〈日野市立図書館〉

- ・ 気積の存在を認識できる

天井高さが高い方の空間では、仰角 27° に天井の高さが変わる先端が収まる平面範囲が天井の高い空間の床面積の半分以上存在する。また、天井が低い方の空間では、仰角 27° が天井高さの低い方の天井に触れる範囲が多く見られた(図 19)。

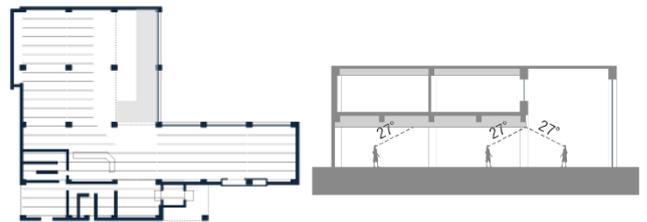


図 19 日野市立中央図書館

異なる床レベルの場合

〈埼玉県立博物館〉

- ・ 気積の存在を認識できる

一方の吹き抜けは、床レベルの違いが大きいため、対象から距離を取る必要があるが、もう一方は床レベルの差が小さいため、対象に近付いても仰角 27° と 47° に収まる。また、床レベルの差が大きい吹き抜けよりも、小さい方が距離を取れるため、仰角に収まる平面範囲が大きい(図 20)。

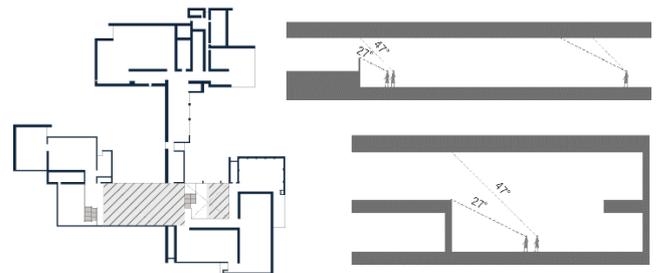


図 20 埼玉県立博物館

3-8. 仰角と気積の存在を認識することの関係性

- ・ 床スラブ部分が見える場合

吹き抜けが小さかったり、同じ断面上で重なっていたりすると、仰角 47° に床スラブ部分先端から真上に伸ばした延長線と天井との交点が収まらなくなることがわかった。しかし、同じ断面上に吹き抜けが重なっている場合は、対象から距離を取れる平面的な余裕があるならば、仰角 47° に対象が収まると読み取れる。また、スラブ部分の厚さに対する天井の高さの比率が、気積の存在を認識できる範囲にはいっていても、床スラブ部分の上辺が仰角 27° に収

まることと、床スラブ部分先端から真上に伸ばした延長線と天井との交点が仰角 47° に収まることの両方を満たしていないと、気積の存在を認識できないと考えられる。

・天井まで達しない壁の場合

視線を遮るための壁の先端が仰角 27° に収まり、かつ仰角 47° にその壁の先端から真上に伸ばした延長線と天井との交点が収まるために、壁の高さをなるべく抑え、そして壁の高さと天井の高さとの差が小さくなるようにすることで、気積の存在を認識できると考えられる。

・異なる天井の高さの場合

仰角 27° に、天井の高さが変わる先端が収まることによって、一方の空間からもう一方の空間が客観的に見えると考える。天井の高さが低い方の空間において、仰角 27° に天井が触れる平面範囲が大きいことで、より、自身がいる天井の低い気積から、天井の高い気積が客観的に見えるようになると考える。

・異なる床レベルの場合

異なる床レベルの空間においては、図5で示した天井の高さ(下)がないことで、床スラブ部分が壁のようになることなく気積の存在を認識できるように働くため、床レベルが変わる先端と、高い側の床の先端から真上に伸ばした延長線と天井との交点が仰角 27° から 47° に収まることで、気積の存在を認識できると考える。

4. 場の事例比較

4-1. 体験したことのある建築に見られる場

建築が人に寄り添う場が生まれるとき、「触覚的な視覚」によって空間を見ると考える。そこで、自身が体験したことのある建築(表1)に見られる、「触覚的な視覚」における、場が生まれるための要素を6つ挙げる。

(a) 階段下の領域

上の階へと続く階段の下には、階高より低く、小さな場ができる

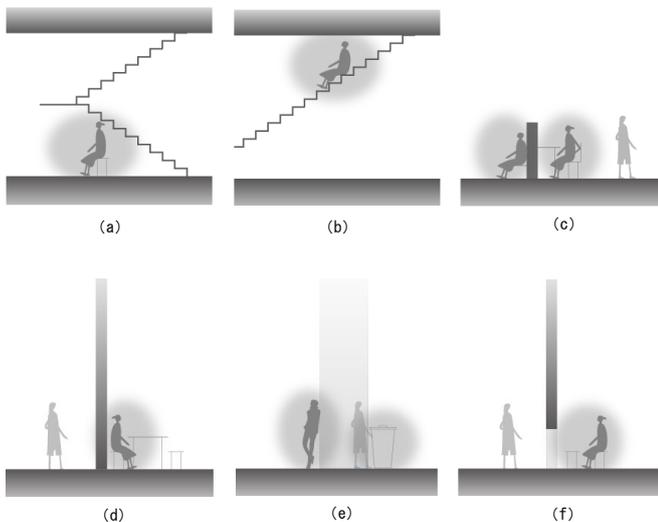


図2-1 気積の存在を認識できる建築に見られた場

(図2-1-a)。(えんぱーく 塩尻市市民交流センター)では、椅子を置き、階段を支える柱に寄りかかるように座る場となる。

(b) 階段と天井の間

階段を上ることによって天井との距離が近付くと、階段と天井との間に場ができる(図2-1-b)。(こども本の森 中之島)では、座って落ちていて本を読める場となる。

(c) 腰壁、天井まで届かない壁

腰壁のように天井まで続かず、途中で途切れる壁は、座ることを促す場ができる(図2-1-f)。(えんぱーく 塩尻市市民交流センター)では、立つと吹き抜けへと視線が抜けるが座ると視線が遮られるため、机や椅子で学習したり本を読んだりする場となる。

(d) 壁柱

壁柱は、壁柱の周囲に面的な場ができる(図2-1-c)。(えんぱーく 塩尻市市民交流センター)では、壁柱が周辺に机や椅子を置くことを促し、寄りかかるような場となる。

(e) 人の体の幅より太い柱

体の幅より太い柱は、柱の周囲に留れる場ができる(図2-1-d)。(サンパウロ大学建築都市学部棟)では、柱に寄りかかるようにものが置かれたり、人を待たたりする時の抛り所のような場となる。

(f) 垂れ壁

垂れ壁は、壁柱よりも緩い面的な場ができる(図2-1-e)。(サンパウロ大学建築都市学部棟)では、視線が一部遮られることで、留まることを促し、座って話す場となる。

4-2. ヘルツベルハーの述べる場

ヘルマン・ヘルツベルハー⁷⁾は、場の要素のひとつとして、「座ってもらう」と述べている。建築が座ることを促す例として、柱に基壇があったり(図2-2-a)、窓辺に座れるような腰壁があったり(図2-2-b)、階段の手すり部分の腰壁が水平になっていること(図2-2-c)、等が挙げられている。

また、ヘルツベルハーは、「見える範囲と他人の視線からはずれる範囲とのバランス」という、視線によって生まれる場についても述べている。これは4-1で挙げたような視線を遮る壁のことを指していると考えられる。

これらのことから、建築が引き起こす場というのは、座る行為を引き起こしたり、視線を遮ったりする垂直方向に伸びる壁であると考えられる。

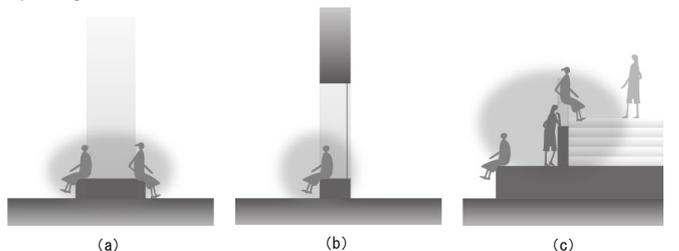


図2-2 座る行為を促す場

5. 設計

5-1. 建築用途

気積の存在と場が共存する図書館を設計する。この図書館では、気積の存在を認識することで空間としての居場所を見つけ、さらに建築によって生まれる場によって留まれる居場所を見つけ出せると考える。

5-2. 敷地

東京都立図書館が作成した、「東京都立図書館調査 令和5年度」⁸⁾より、東京23区における区ごとの図書館数に対する、それぞれの区の人口を求めた。その結果、墨田区は図書館一棟あたり約70,521人と、23区の中で人口に対する図書館の数が一番少なかった。このことから、墨田区に図書館を設けることで、新たに本を読める場所を設けることに加えて、墨田区の人々の新たな居場所となると考える。

敷地は錦糸町駅前にある錦糸町公園横とする(図17)。公園の横に位置していることから、静かに留まれる居場所である図書館が、動き回れる居場所である公園の一部のようになることを期待する。また、駅に近いことから電車で訪れる人々も立ち寄れる図書館になると考える。



図17 敷地周辺図

5-3. 断面構成

気積の存在を認識できる要素である、スラブ部分の厚さが見えることと、床レベルが異なり天井を共有することと、天井の高さが異なり床を共有することを組み合わせつつっていく。床レベルが異なり天井を共有する場合は、スラブ部分の厚さが見える場合と違い、下の空間が見える必要がないため、仰角27°に収まるべきスラブ部分の先端の高さを低く計画できる。そのため、スラブ部分の厚さが見える場合と床レベルの高さに差をつけることができ、気積の存在にバリエーションが生まれる(図18)。

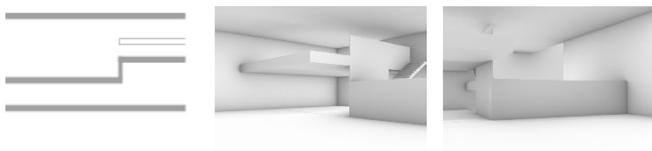


図18 スラブ部分の厚さが見える場合と異なる床レベルの場合

5-4. 平面構成

気積の存在を認識できる要素である吹き抜けは、空間同士を断面方向に隣り合わせる構成である。この構成を平面方向にも用いて、気積の存在同士が面的に隣り合うような平面構成にする(図19)。壁によって仕切りながらも、気積同士の間を大きく隔てないように配置する。そうすることによって、気積の存在を認識できる場面が全体に広がり、気積の存在を認識できる建築になると考える。

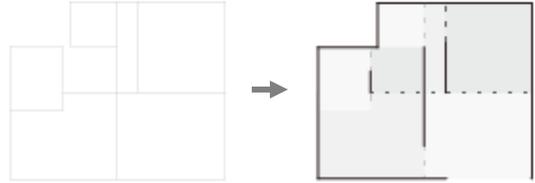


図19 平面構成として、気積の存在同士が面的に隣り合う

5-5. 建築によって生まれる場

視線が抜け、他のスラブ部分の厚さが見える場所を目線の高さにあるスラブ部分によって少し遮ることで留まる場になる(図20-a)。

また、階段の手すり部分の腰壁を水平にすることで、寄りかかったり座ったりする場となる。階段の踊り場下にも座ると頭をぶつけない場ができる(図20-b)。

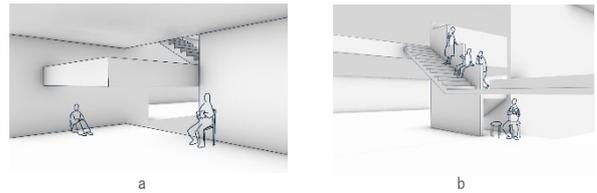


図20 視線が抜ける場所と遮られる場所 (a)、水平な手摺部分の腰壁 (b)

5-6. まとめ

気積の存在と場の共存によって、建築という全体に属する感覚を持つと共に、それぞれが居場所を見つけ、留まれるため、建築自体が居場所になると考える。そのため、地域の人々がふと立ち寄れる居場所であるという図書館以外の用途においても、気積の存在と場が共存する建築自体が人々を受け入れる居場所になると考える。

参考文献

- 1) 坂本卓. 建築の規則—現代建築を創り・読み解く可能性—. ナカニシヤ出版. 2008.
- 2) 田中純. 残像のなかの建築: モダニズムの「終わり」に. 未来社. 1995
- 3) アードルフ・フォン・ヒルデブラント. 造形芸術における形の問題. 加藤哲弘/訳. 中央公論美術出版. 1993
- 4) 前川修. 痕跡の光学: ヴァルター・ベンヤミンの「視覚的無意識」について. 晃洋書房. 2004
- 5) 芦原義信. 外部空間の設計. 彰国社. 1975
- 6) 社団法人 人間生活工学研究センター. 高齢者対応基盤整備研究開発/第II編 データベース整備(動態・視聴覚特性). 2000
- 7) ヘルマン・ヘルツベルハー. 都市と建築のパブリックスペース: ヘルツベルハーの建築講義録. 森島清太/訳. 鹿島出版社. 2011
- 8) 東京都立図書館. “東京都立図書館調査 令和5年度”. 東京都立図書館. 2023. [3.凡例 05 \(tokyo.lg.jp\)](https://www.tokyolibrary.jp/), (参照 2024-01-03)